

やまと 民俗への招待

満月を眺めると、月に斑の模様がある。兎が臼と杵で餅をつく姿とするが、これは飛鳥時代に唐から伝わったもので、中国では、ヒキガエルとも不老不死の仙薬を作っている姿だとする。この兎の狩猟伝承を綿密に調査研究していたのが当時文化庁主任文化財調査官だった天野武さんで、私も奈良県での兎狩りの伝承を知りたいと心がけていた。

県内には、ウサギダニ、ウサガダニ、ウサギオ、ウサギダ、ウサ

ギデン、ウサギハタなどの地名が各地に残っている(『大和地名大辞典続編』)。生駒市秋の台の文化財保存館で、浄瑠璃や芝居関係の用具を調査している時、傍らに「兎狩網」と墨書した木箱を見たことがある。明治24年(1891年)正月に大字で新調したとあり、網は既に亡失していたが、山の上に網を仕掛けて、下から勢子が兎を追いつ



兎狩網を入れていた木箱—生駒市秋の台の文化財保存館で、筆者提供

兎狩り 舌に残る記憶

げて捕り、兎鍋にして食べる話なども聞いた。

川上村東川の松本修

さん—1936(昭和11)年生まれ—は家で野兎を飼っていたとい

を子供が世話をし、学校へ行く時に、骨付きの肉を食べながら登校したこともあったという。

でのことだろう。1955(昭和30)年ごろ、小学生の時に香芝市関屋あたりの山で、兎狩りを経験したという男性もいる。木の芽時の兎は身体にいらしく、「青山兎見ても薬」という言葉を聞いたこともある。山の神の乗り物とされ俗信も多い兎であるが、昭和30年代ごろまでは、観光行幸化しながらも、狩りの対象としてまだ食べられていた。

(奈良民俗文化研究所 代表・鹿谷勲)

—隔週掲載